

Meeting Report

第41回欧州臨床腫瘍学会(ESMO 2016)

The 41st European Society for Medical Oncology Congress (ESMO 2016)

会期：2016年10月7～11日

会場：Bella Center(コペンハーゲン)

堀池 篤

公益財団法人がん研究会有明病院呼吸器内科医長

第41回欧州臨床腫瘍学会(ESMO 2016)が、2016年10月7～11日までの5日間、デンマークのコペンハーゲンで開催された。会議が開催された10月初旬は、日本はまだ残暑といってよい暑さが残っていたが、北欧のコペンハーゲンはどんよりとした曇り空が続き、最高気温も10℃台と早くも晩秋の装いであった。会場となったBella Centerは、スカンジナビアで最大規模の会議場で、会場内はシンプルかつ朗らかな配色の北欧デザインでコーディネートされ、まるでIKEAの中に会議場があるような洗練された雰囲気であった。

ESMOのハイライトは、米国臨床腫瘍学会(ASCO)のPlenary sessionに相当するPresidential Symposiumである。筆者は2008年、2012年、2016年と3回、ESMOに出席しているが、Presidential Symposiumは、2008年は1セッションであったが、2012年は2セッション、2016年は3セッションとセッション数が増え、以前に比べ重要な演題が数多く発表されている印象を憶えた。近年の話題はがん免疫療法であるが、今回のESMOでもPresidential Symposiumに採択された12演題中がん免疫療法の演題が6演題を占め、がん免疫療法の演題が集中した3日目のPresidential Symposium 2は、会場周囲に参加者が溢れ、会場内に入れない参加者を整理するため、会場外の廊下で係員が拡声器を使って誘導するなか発表が開始されるという異様な雰囲気のなかで行われた(写真1)。なかでも注目されたのは、未治療非小細胞肺癌(non-small-cell lung cancer; NSCLC)を対象に行われた免疫チェックポイント阻害薬であるペムプロリズマブ、ニボルマブの2つの第Ⅲ相臨床試験(KEYNOTE-024試験、CheckMate 026試験)である。両試験ともすでにプレスリリースにて試験の主要結果が報告され、その結果の詳細が注目されていた。

まず、Reck医師よりKEYNOTE-024試験が報告された。本試験は、programmed death-1 ligand(PD-L)1強陽性(50%以上)の上皮成長因子受容体(EGFR)遺伝子変異、ALK遺伝子転座陰性未治療進行NSCLCを対象として、ペムプロリズマブ(200mg/body、3週ごと投与)群とプラチナ製剤併用化学療法群を比較する第Ⅲ相臨床試験である。詳細は本誌の別稿で記載があり割愛するが、主要評価項目である

無増悪生存期間(PFS)において、ペムプロリズマブ群(中央値10.3ヵ月)は化学療法群(中央値6.0ヵ月)に比べ有意に延長することが証明された(ハザード比(HR) 0.50, 95%信頼区間(CI) : 0.37~0.68, $p < 0.001$, 図1)。奏効割合、全生存期間(OS)ともペムプロリズマブ群が有意に優れ、演者のReck医師は、ペムプロリズマブは、PD-L1高発現の進行NSCLCの初回治療の新たな標準治療になるべきであろうと結論づけた¹⁾。また、本試験結果は、ESMO発表同日の10月9日に『The New England Journal of Medicine (NEJM)』誌にも掲載された²⁾。Reck医師の発表が終わると、会場内はそれまでの静寂から一転し、割れんばかりの拍手喝采に包まれた。すでにプレスリリースにて主要結果が報告されていたが、多くの聴衆の予想を超える素晴らしい結果であったことが、この聴衆の反応となったのであろう。

Discussantの講評を挟んで、Socinski医師よりCheckMate 026試験の結果が報告された。ニボルマブは、ペムプロリズマブよりNSCLCに対する開発はわずかに先行し、米国では2015年10月、日本でも2015年12月に製造販売承認を受け、すでに臨床導入されている。2次治療ではPD-L1の発現によらず組織型ごとの試験が行われたが、本試験では、PD-L1



写真1 Presidential Symposium会場への入場を待つ聴講者